

江東区内の指導者を対象にセミナー

YMCAの介護予防スキル 区内に広める

東京YMCAが指定管理している「児童高齢者交流施設」では、高齢者を対象とした介護予防のプログラムを数多く実施している。その豊富な指導力やリソースと指導力が、区内で介護予防プログラムに従事するスタッフ向けの「スキルアップセミナー」を2月14日(土)にグランチャ東雲で開催した。この試みは平成25年3月にも実施しており、今回が2回目の運営となる。



高齢者の立場になって、いすを使っただけのトレーニングをしてみる区内の指導者たち。

当日は江東区高齢者支援課長が見守る中、30名の介護予防プログラム従事者に対して、グランチャ東雲のスタッフが、教室の雰囲気づくりやウォームアップ、クールダウン、ストレッチなどの運動の基礎理論と実技を指導した。また、セミナー後半では、学んだスキルを各現場で活かせるよう、ロールプレイを行い、実際の指導体験をしていただいた。

今回のセミナーでは、高齢者にとって分かりやすい指導見本や声かけ、アイコンタクトによる情報収集など、YMCAならではのノウハウが詰まっていた。また教室の雰囲気作りでは、参加者の緊張を解き、和やかにプログラムの進行が出来るように、アイスブレイクのスキルも紹介した。区内の事業所に従事するスタッフは専門職であり、ある程度の指導スキルは持っているが、アイスブレイクの技術については、グランチャ東雲のスタッフの指導力が際立っている。東京YMCA

が、ボランティア育成やキャンプなどの、コミュニケーション活動で長年培ってきた技術を伝えることができた。

4月からの介護保険法の改正で、高齢者を取り巻く環境は変化をしていくと思われる。予防給付の訪問介護と通所介護が地域支援事業へと組み入れられ、再編成されていくが、今回のスキルアップセミナーで学んだ、東京YMCAの技術が区内事業所に展開されていき、高齢者のために役立つ、地域社会への奉仕へつながることを願いたい。

(グランチャ東雲 花井雅男)

登山家・田部井淳子さん講演

“人生は8合目からおもしろい”

1月19日、賛助会主催の「新春特別午餐会」が開催された。卓話者は登山家の田部井淳子さんで、テーマは「人生は8合目からおもしろい」。会場の学士会館には東京YMCA会員など62名が集い、午餐をともにした後に1時間の卓話を耳を傾けた。



好奇心いっぱい生き方をおもしろい田部井淳子さんを語る

世界最高峰エベレストの女性世界初登頂に成功した田部井さんだが、世界の山々の登山にとどまらず、年齢や経験にもこだわらず、好奇心いっぱいの人生について、パウフルかつユーモア豊かにお話しくださり、会場を惹きつけた。東北の高校生を富士山登山に招待するプロジェクトなど、田部井さんならではの震災復興支援の取り組みについて、1920年代から続く(賛助会 戸坂昇子)

横浜Y日本語スピーチコンテスト

ブ・ミン・ドゥクさんが 最優秀賞

2月1日、横浜YMCA 130周年を記念して行われた横浜YMCA学院専門学校、横浜ワイズメンクラブ共催の日本語スピーチコンテストで、東京YMCAにほんご学院から参加したブ・ミン・ドゥク(Vu Minh Duc)さんが、最優秀賞を受賞しました。



ブ・ミン・ドゥクさんの出身地、ベトナム・ホーチミン

スピーチのテーマは「まかない 何食べたい?」。アルバイト中に失敗した自分を叱らなかつた。9名の参加者で最後

た日本人の先輩とのやりとり、そしてその先輩から学んだことを話しました。9名の参加者で最後

安全な放課後と子どもの主体性

「このままでは日本の社会保障制度は破綻する」。元号が昭和から平成に変わった1989年。「1・57ショック」という言葉が話題となった。

ひとりの女性が生涯に産む子どもの数(合計特殊出生率)が1・57人ということが分かったのである。

その波を学童保育も受けていることになる。

2007年頃から少子化の制度が本当の意味で子育て支援に役立っているのか、私は疑問に思っている。つまり、安全・安心を優先するあまり、子ども自身の自由や主体性がないがしろにされてはいまいか、ということがある。

専門的な知識とスキルをもった大人が、子ども一人ひとりの発達イメージを描き、極力開放的な環境の中で、主体性と社会性を育むことが「育ち」への支援なのではないだろうか。

佐藤 健 (東雲児童館・学童クラブ 館長)



東京YMCA名誉会員

駿河 敬次郎さん (95歳)



「小児外科のバイオニア」と称される。賛助会病院の外科部長だった1952年、まだ日本には「小児外科」がなかった時代に、新生児の腸閉鎖の手術を国内で初めて成功させた。奇形児の手術は無駄、と非難もされたが、その後もさまざまな難病の新生児の手術を手がけた。やがて社会的にも注目され始め、国内各地に小児外科が作られていった。

1920年、北陸・金沢市の生まれ。幼少時から自宅前の教会に通い、第四高等学校ではYMCA(現ハイスクールYMCA)に所属。東大でも学生YMCAの寮で暮らした。東京YMCAとの関わりは65年、江東プランスの委員から始まり、社会体育専門学校の設立にも貢献。常議員や理事も務めた。日本で初めてサリドマイド児の手術をした際には、YMCAと共にそのリハビリ運動を開発した。

順天堂大学の教授だった78年、ザンビア共和国に小児医療センターを建設する政府のプロジェクトを指導した。以後「日本ザンビア医学協会」を立ちあげ、今なお若手医師の養成を続けている。YMCAはその事務局等として共に歩んできた。ザンビアから文化交流使節団が来日した際には、齋藤總衛総主事と共に募金活動に奔走し、1か月で1200万円を集めた逸話もある。ザンビア以外にも、手術や講演で訪れた国は60か国を超える。まさに世界中を駆け回ってきた。

大学退官後は、浦安市川市民病院や八重洲クリニックで院長を務めた。趣味のテニスも91歳まで続けた。94歳の時に自宅で開業。患者の話やゆっくり聴き医師の紹介をする。若い頃にはできなかった診療をしている。

その果敢な生き方の秘訣を聞いてみると、2つの聖句が返ってきた。

「(神は) 耐えられないような試練に遭わせることはない(※1)」と、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい(※2)」

10代の頃に友と議論したこの聖句をずっと大切にしていたという。「だからこそ、何があっても95年乗り越えられた」。実に気さくに、軽やかに笑う。

(聞き手・文・広報室)



「ぶどうの枝」

YMCAの人

※1「コリントの信徒への手紙」10章13節 / ※2「テサロニケの信徒への手紙」5章16〜18節

